

## 志賀直哉「剃刀」論

——〈アンチ・犯罪小説〉——

亀井千明

### 1 はじめに ——「剃刀」は〈芳三郎一人の物語〉か——

紅野謙介氏の論稿「志賀直哉『剃刀』をめぐる演習——文学への解放／文学からの解放——」は、大学の学生を対象として書かれたもので、<sup>(1)</sup> 紅野氏は文学を研究することに於いて、「言説の支配から逃げ出すことはできないが、つねにその限界性に自覚的であることは大事なことだ。」と呼びかけつつ、「主題抽出という名目で、往々にして私たちは主人公の心理描写をたどったりするが」、「見落としがち」な「小説を構成しているさまざまな要素」や「ストーリーに絡みつくようにある無数のエピソード群」という「テキストを作り上げているこうした細部の要素をそれぞれに解読し、自分のなかで関連づけ、意味づけていかなければならない」とし、そのような試みを為す対象作品として、志賀の初期作品「剃刀」（『白樺』、明治四十三年・六）を取上げている。そして、それまで触れられることのなかった作品内設定——「麻布六本木」という地名と、「秋季皇霊祭」という時間——に着目し「辰床」が「近代天皇制国家の聖と賤の構造に組み込まれた空間に立っている」事を見出したのは卓見といえるものである。

ところでこのあざやかな読みを提示する紅野氏が論展開上、まず目を付けたのが「主人公の芳三郎」が持つ「自己の論理」である。いわゆる「剃刀」論と言われるものにおいては、分析上芳三郎に主眼が置かれているようだが、紅野氏が言い述べるように、芳三郎は作品の主人公として認められてしまっているといえよう。

結局のところ私たちは、主人公とされる人物の「心理描写」にしる「自己の論理」にしる、「剃刀」に対して芳三郎ありきの分析しか行うことができないのだろうか。確かに「剃刀」は芳三郎を中心に描かれており、特に痲癩を起こしイライラしているところや、最後の客を殺してしまうシーンは読み手に深い印象を与えるものである。そのことからか「剃刀」には〈犯罪小説〉との呼称が附されることになり、志賀文学において「剃刀」にはじまる〈犯罪小説〉の系譜なるものも見出されている。<sup>(2)</sup> また同じように殺人を扱った作品である「范の犯罪」との繋がりを意識することは、〈犯罪〉に着目することに拍車をかけることになったといえる。<sup>(3)</sup>

このように、「剃刀」の作品研究は芳三郎やその行為に主眼を置いた解釈が行なわれているものの、作者である志賀は、作品発表の後年に異なる見方を示している。それは自作解説「創作余談」（『改造』、昭和三・六）の中で「床屋で恐らく誰もが感ずるであらう強迫観念から作り上げたものだ。」と述べているものである。<sup>(4)</sup> つまり志賀は剃刀をあてられる客側が感じる強迫観念を元にして、作品を描いたと解説しているのである。<sup>(4)</sup> この「剃刀」の自作解説は、志賀研究において作者の作品に対する考えを示した格好の材料として、論文冒頭に必ず踏まえらるという一般的な「余談」の扱われ方に反し、これまでの「剃刀」論の中で、あまり取り上げられることがなかった。<sup>(5)</sup> それは当然のことであろう。なぜなら芳三郎を主体とする作品解釈とは正反対の、客を主体とした内容になっているからである。となると、「余談」は私たちに、芳三郎を脱中心化してしまえる作品解釈の可能性が示していること示してくれていることになる。志賀の自作解説が教えてくれるように、芳三郎以

外にも登場人物は存在するわけで、芳三郎に焦点化してしまうと、例えば妻・お梅は「なきに等しい」(紅野氏) 存在と取られる。又作品設定では、(麻布六本木)や(秋季皇霊祭)という現実世界にも繋がる設定が作品冒頭でされている反面、作品のラストでは「夜も死人の様に静まりかへつた。総ての運動は停止した。」というように、一気に非日常的な物語世界が作り出されている。そして、次第に無人化(正確には完全な無人化ではなく、店内で眠りこける店員の存在があるのであるが)されていく店内で芳三郎が殺人を犯し、それを突然擬人化された鏡が見つめているのである。この突如として現れた鏡によるラストは、時に否定的に解釈されることもあった。<sup>6)</sup>

よって本稿では、無条件に芳三郎を中心化してしまう前に、紅野氏が説くように、「見落としがち」なテクストを作り上げている作品の中に芳三郎を戻し(芳三郎の物語)となつている「剃刀」の読み直しをする。まずは芳三郎と他の登場人物の関係性について考えてみる。

## 2 他者の中の芳三郎

「剃刀」における芳三郎以外の登場人物は次の通りである。芳三郎の妻であるお梅、使用人の兼次郎に錦公、名前だけの登場だが芳三郎が小僧時代に同僚であった源公に治太公、それに客の女中と田舎出の男である。「剃刀」は短編作品であるが、その中でそれぞれの人物が持つ特徴や性格に至るまで説明されている。<sup>7)</sup> これは、他の登場人物たちも芳三郎と同じように、作品内人物として十分自立性があると思ふことができるだろう。

また、こういった人物造形の説明は、語り手によって行われている。語りの視点はその殆どが芳三郎に置き換えることができるもの、お梅や田舎出の客の視点に重なっていることもある。<sup>8)</sup> この統一されていない語り方を否定的に捉えるのではなく、そういった語り方が示すのはむしろ芳三郎だけに作品が焦点化されることのないものといえないだろうか。芳三郎を中心に見た場合、周囲の人物と齟齬を起こす芳三郎という構図しか見出せないものの、芳三郎と同じくらい他の登場の人物たち

にも自立性を認め、芳三郎との関係性について見直していく。

まず関係性を重視した上で、芳三郎の人物像について考えてみたいのだが、「剃刀」を(犯罪小説)などと捉えた時、剃刀の名人であることや、癩癩持ちであることはよく押さえられている事柄だった。しかし、かつて共に小僧として働いていた源公に対して「朋輩だつた好誼」を重んじたり、源公に悪さをそそのかされる治太公を「可哀想に思つて度々意見」したりする他者へ配慮する面も持ち合わせている。そのような芳三郎と一緒にしたのが「辰床」の先代の娘・お梅である。このお梅はどういう人物であろうか。「剃刀」においては、一見芳三郎はお梅を冷たくあしらひ、全く相手にしていないようにも受け取れる。しかし、それは正しい二者の関係性の把握だろうか。今は削除されてしまったが、お梅は初出で「娘は美しい女であつた。」との記述もあり、源公はこのお梅に気があつた為、芳三郎とお梅と一緒にした際、店を出てしまったのである。そのような魅力あるお梅は芳三郎に対して非常にかいがいしく接していることが分かる。風邪を引いた芳三郎を気遣い、薬や食事の世話など色々気を回し、よき妻ぶりを見せているといえよう。<sup>10)</sup> しかし、芳三郎にひたすら従うかいがいしい妻がイクォールお梅とはできない。次の一文を見てもらいたい。芳三郎とお梅との関係性が端的に窺えるものであると考える。

「……起きてるならかいまきでも掛けて居なくちや仕様がな、いねえ」

「いいから持つて来いと云ふものを早く持つて来ねえか」割に低い声では云つてるが、癩でピリクして居る。お梅は知らん顔をして、かいまきを出し、床の上に胡坐をかいてゐるのに後から羽織つてやつた。芳三郎は片手で擔ぐやうにしてかいまきの襟を掴むとぐいと剥いで了つた。

お梅は癩癩を起す芳三郎を、腫れ物を触るやうに気遣うのではない。あくまで日常的なものと見なして「知らん顔」し、それに動じない姿を見せている。そして風邪の体を気遣い、かいまきを被せてやろうとするお梅に対し、芳三郎は意固地に何度もそれを退けようとしている。この後にお梅は半纏を「子供でもだますやうに云つて、漸く手を通させ」るのであるが、結局このような芳三郎のお梅に対する態度は、甘えのようにも受け取れないだろうか。それは母親に接する子の様なもので

ある。痲癩ゆえの邪険な態度というだけでなく、痲癩を起こすのも妻への甘えとして受け取れるのである。

次に使用人との関係性はどうか。今辰床にいるのは、「二十歳になる至つて氣力のない青白い顔」の兼次郎と、「十三」の「頭が後前にや、ケ長い子供」の錦公である。店に入って一ヶ月も経たないだろう「氣力のない」の兼次郎と「子供」の錦公とは、風邪で寝込んである芳三郎の助けにはならない。むしろ店を省みない勝手ともいえる行動をとっている。兼次郎は年下の錦公よりも重きを置いて任せられていたであろう店を離れ、「時子」という女に会いに行った。そのために、芳三郎は店に立つことになったのである。そのような使用人に対し、芳三郎は怒ることはない。店の仕事を放棄した兼次郎に対しても、躍起になって引き戻そうとするのではなく、お梅が錦公に帰ることを促すように指示した言葉に対しても、まだ早いと述べている。又、時子の所に行った兼次郎を「時子を張りに行きました」と真面目に答える錦公は「子供」そのものである。

芳三郎の事情を考えない者としては、店の客もそうであろう。外から来る客にとって、芳三郎の体調や痲癩は知らないことであるし、関係のないことである。「剃刀」の中に登場してくる客は二人いる。主人の剃刀を持ってきた竜土の女中は、自らの都合で一方的に芳三郎に研いでもらうことを希望する。そしてもう一人芳三郎に殺される田舎出らしい若者は、「黒い凸凹の多い顔」をしており、そのことから「昼は荒い労働についてゐる者」ということが知れるとされている。彼は「親方、病気ですか」などと芳三郎の体調を気にかける言葉を掛けながらも、女郎屋へと早く向かいたいという自分の都合から、ザツと髭をあたつてくれることを希望する。そのような客に対し、芳三郎は「ありがたう」などと口だけだが礼を言うことは出来ていない。あくまで店主と客という関係を守っているようである。しかし時間が経つにつれて芳三郎は、客という相手の立場ゆえ口には出さないものの、若者が与える女郎屋という情報や、振る舞いが痲癩に触つて不機嫌になっていき、それに若者も氣付いて黙り込む。若者はしまいには眠り込んでしまうのであるが、たとえ黙っていても剃刀のあてにくい「肌理の荒い」顔は、芳三郎の神経を逆なでることとなる。

このように芳三郎と他のそれぞれ造形された登場人物との関係性は均質のものではない。芳三郎は常に痲癩で周囲に当り散らしているわけではなく、使用人に対してより、お梅に対しては妻であるという近しさからか痲癩を起こしはするが、それも単純に痲癩と言つてしまえるものではなく、その中には甘えの態度も見られるのである。また、客に対してはいらつきながらも、商売上から口には出せないでいる。よつてこのような関係性は、他の登場人物らとの関係に齟齬を起こす芳三郎と一口に言い得てしまえるものではない。むしろ、芳三郎は他者との関係性の中で存在している人物といえるのである。

このように、他の登場人物たちとの関係の中の芳三郎の姿が確認できたわけであるが、最終的には殺人を犯すこととなつてしまふ。芳三郎の殺人という他者を圧する最大の行為を、それまで取り巻いていた家族や使用人には見届けられることはなかったのだが、それは当然考えられることとして、見ていれば止めに入られるからであろう。殺人という結末が成立するには、店内を無人化する必要があつた。それまで芳三郎の体調が心配で熱心に視線を向けていたお梅も、「奥で赤児の啼く声がしたので」奥へと入つて行き、錦公も「窓に倚つて居眠つて居る」。そして当の殺される客も「昼の烈しい労働から来る疲労でうつら／＼仕始め」、芳三郎だけが剃刀を持つて仕事を行う「ひつそり」とした店内となるのである。となると、それまで他者の中に居たはずの芳三郎が一人になり、その時に殺人を犯してしまうことになるのだが、それを鏡が見届けていたのである。それを店内の鏡が見届けるのであるが、鏡はただ芳三郎の行為を見届けたわけではない。「冷やか」という感情を伴つた視線を投げ掛けているのである。上で論者は「剃刀」における、へ麻布六本木」という現実的な世界から、鏡が擬人化される非日常的な世界への移行という作品内設定を不可思議なものではないかと述べた。しかし、芳三郎が作品内において他者との関係性の中で存在するということ踏まえる時、この感情を伴い、擬人化された鏡を、芳三郎にとつての他者と考えることが出来ないだろうか。

そのような鏡の存在を示すのが語り手である。作品において語り手はほぼ芳三郎に視点をあてており、偶に他の登場人物の視線にも寄り添ふことは先にも述べた。しかし最終的には、鏡の芳三郎の行為を眺める視線を打ち明けるのである。つまり語

りは、どちらかといえば芳三郎寄りの見方を示しつつも、最後には他者に眼差される存在としての芳三郎の姿を打ち出しているのである。この自在ともいえる語りこそが、他者の中の芳三郎の姿を浮かび上がらせ、現実的空間と非日常という変質的な作品空間を繋いでいる。

### 3 おわりに

#### ——「アンチ・犯罪小説」としての「剃刀」——

以上「剃刀」に対し、読者側が一方的に見出した主的人物を中心とする関係性を見直した本論の試みであるが、志賀テクストにおける登場人物等の真の関係性を見出す作業は、他にも見受けられる。例えば高橋英夫氏(『志賀直哉 近代と神話』[文藝春秋社、昭和五十六])が「山科もの」と呼ばれる志賀の一連の作品に登場する夫と妻に、「我儘な夫と忍従する妻という外見上の対比」を見出しつつも、実は「夫はただ横暴であるのではないし、妻はただ堪え忍んでいるのではない。」と述べているように、また伊藤佐枝氏(『二つの家庭、一つの共同体、そして個々の家族たち——志賀直哉『和解』論』(『都大論究』三六号、平成十一・五)が、この高橋氏の言葉を引きながら「和解」(『黒潮』、大正六・十)の「一見夫唱婦随的光景」に「むしろ妻の非難がましい沈黙に圧倒されかかっている順吉の狼狽」を見出ししているように、本稿の試みもまた両氏に通じるものがある。

しかし、最後に語りが示してくれた非日常的な世界に突然の如く現れた鏡は、単なる他者と呼べないのではないかと考える。もちろん「冷やか」な感情を伴いつつ他者として芳三郎の殺人行為を眺めるものの、行為の是非を問うてはいるわけではない。となると、芳三郎の殺人は犯罪として成立するものであろうか。犯罪の本来的字義としては、犯した罪であり、違法行為というふうなものである。「剃刀」は現実世界に通ずるような設定をされながらも、最終的にはその現実を離れた作品世界となつていくことはこれまで繰り返し触れてきた。つまりそのような非現実的世界内で、社会的に問われることがない放免化された殺人は犯罪とはいえないもので、むしろ殺人が犯した罪として成立することのない「アンチ・犯罪小説」として

の「剃刀」の姿が見えてくるのである。

#### 註

- (1) 紅野謙介「志賀直哉『剃刀』をめぐる演習」(『学叢』第四六号、平成一・三)「日本文学研究資料21 志賀直哉 自我の軌跡」(『有精堂、平成四・五)に所収される際、紅野氏は追記として「本稿は学生を読者対象とする学部内広報誌に書いたものである。」ということを書かれている。
- (2) 「犯罪小説」とは宮越勉氏が「志賀直哉『范の犯罪』とその周辺——『右顧左顧』からの脱却——」(『文芸研究』八二、平成十一・九)において指摘したものである。その前に山崎正純氏も「志賀直哉論」——『犯罪小説』をめぐる——(『大阪女子大学国文学紀要 女子大文学』国文学 第四十九号、平成十・三)の中で「剃刀」を扱っている。また、「剃刀」の他に「犯罪小説」という一連の系譜に入る主だった作品名を挙げておくと、「濁った頭」(『白樺』明治四十四年四月)「クロード・ディアスの日記」(『白樺』大正一・九)「范の犯罪」(『白樺』、大正二・十)「児を盗む話」(『白樺』、大正三・四)などである。そのどれもが、殺人または誘拐を扱ったものである。
- (3) 「剃刀」の草稿とされるものの中に、予審のシーンがあり、これが「范の犯罪」との繋がりを更に意識させることとなる。現行の「剃刀」では、この予審のシーンは無くなり、殺人のシーンが盛り込まれている。
- (4) このような扱い方が志賀研究において定着していたのは、作品理解に研究者が参考に出るような、適切ともいえる解説を志賀がしていたということになるだろうし、研究者の志賀作品に対する解釈と、志賀の自作解説とに間にずれがなかったのだろう。ところで作家の阿部昭氏は『短編小説礼讃』(昭和六十一・八、岩波新書黄版)において、様々な作家の「短編作品」の魅力を説いているのだが、その中で「剃刀」も取上げられており、阿部氏は「余談」の解説文をそのまま受け取っているのである。そして阿部氏は研究上重きを置かれる「破局(論者注・殺人のこと)」には全く拘ることなく、むしろあまり着目されることのない芳三郎とお梅とのやりとりで作品の美点を見出し、研究とは異なる読みが展開されているのが興味深い。
- (5) 「創作余談」をめぐる志賀研究のあり方を指摘したものに、拙稿「志賀直哉『創作余談』に関する一考察——『城の崎にて』をめぐる言説を中心に——」(『甲南女子大学大学院論叢』第二十四号、平成十四・三)がある。
- (6) 山田有策「志賀直哉の『妄想』」(『国文学』 解釈と鑑賞、昭和六十二・一)の「エンディングの文体として技巧に過ぎず」と指摘がある。
- (7) 「剃刀」には前掲(3)でも触れたように草稿とされるものが存在する。それは「小人間の行為」(A) (明治四十二年九月三十日執筆)、「小人間の行為」(B) (執筆年不明。しか

し前掲「説小人間の行為「A」執筆直後に書かれたものではないかと想像される。」「説殺人」(明治四十一年十月十三日執筆)という三つの草稿が存在することが、現在までに確認されているのだが(これらの草稿はすべて昭和四十八年に刊行された『志賀直哉全集 第一巻』(岩波書店)に収められたものであり、草稿の各タイトルは全集中において付けられたものであることを断っておく)、これら草稿群よりも現行の「剃刀」において、特に芳三郎に殺される客の人物造形が詳細になっていることが確認できる。

(8) 具体的には、お梅の「その冷えぬ内に食べさせたいと思つたが疲れ切つて眠つてゐるものを起して又不機嫌にするのもと考へ、控えて居た。」や、客の「何とか云つて貰ひたい。」などの箇所である。

(9) 伊藤佐枝氏の「居場所なき(犯罪)行為(者)を語る二つの方法——志賀直哉『剃刀』『范の犯罪』をめぐって——」(『都大論究』三八号、平成十三・六)は、タイトルにもあるように語り方に着目された論稿であるが、「剃刀」の語りについて、その視点が交錯していることを指摘され、芳三郎の変化についても独立したのではなく、周囲の人々との関係性から起こっていることを、この視点の交錯が照射させていると述べている。論者としてはこの伊藤氏の指摘を受けつつ、周囲の人々の人物造形に着目して、芳三郎との関係性を捉え直したいというものである。

(10) 佐藤健二氏(『明治国家と家庭イデオロギー』、『1家族の社会史』、岩波書店、平成三・七所収)は明治三十六年から七年に刊行された村井弦斎『食道楽』という小説を、「家庭」イデオロギーの分析の対象にされているのであるが、その中で「家族成員たちの健康管理をも、『細君』の任務の理想にかざえいれてゆく」ことになっていることを指摘されている。

\*本稿における「剃刀」本文の引用は、総て平成十一年岩波書店刊行の『志賀直哉全集 第一巻』に拠るものとする。ルビなどについては、極力省略させていただいた。